

専任教員教育研究業績

平成 28年 5月 15日記入

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
根来 章子	ねごろ あきこ	保育学科 通信教育課程	教授・准教授・ 講師 ・助教	男・ 女

小田原短期大学における担当科目名

音楽表現ⅠA、音楽表現ⅠB、音楽表現Ⅱ、音楽表現Ⅲ、言語表現

学 歴

和暦(西暦)年 月	事 項	学位
平成9年3月	横浜国立大学 教育学部 中学校教員養成課程音楽専攻 卒業	学士(教育学)
平成11年3月	お茶の水女子大学大学院 人文科学研究科 博士前期課程 人文学専攻 音楽表現論講座 修了	修士(人文科学)
平成24年3月	お茶の水女子大学 人間文化研究科 博士後期課程 比較社会文化学専攻 単位取得退学	

教 育 歴 ・ 職 歴

名 称	期 間	教育内容又は業務内容
沖縄県立芸術大学 (専任助手)	平成15年4月～18年3月	和声初級・中級担当
横浜保育福祉専門学校 (専任教員)	平成23年4月～26年3月	音楽表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、保育内容(表現)、保育実践演習、 小児体育、卒業研究 担当
横浜保育福祉専門学校 (非常勤講師)	平成26年4月～28年3月	音楽表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ 担当
鎌倉女子大学・鎌倉女子大学 短期大学部 (非常勤講師)	平成26年4月～現在	音楽①、音楽②、保育内容演習表現 担当
秋草学園短期大学 (非常勤講師)	平成27年4月～28年3月	保育指導方法
小田原短期大学	平成28年4月～現在	保育学科通信教育課程 講師

所 属 学 会 等

名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)
民族芸術学会	平成23年4月	
日本保育学会	平成26年9月	
全国大学音楽教育学会	平成28年2月	

社 会 活 動 等

名 称	活動期間	活 動 内 容
神奈川県・(社)神奈川県専 修学校各種学校協会協働事 業「仕事のまなび場」幼児音 楽系講座担当	平成23年8月～平成25 年8月	神奈川県内の高校生のキャリア教育の一環として実施さ れる県委託事業「仕事のまなび場」における保育士体験講 座の音楽系講座を担当した。

担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等

名 称	取得年月	取 得 機 関
中学校教諭専修免許(音楽)	平成11年3月	東京都
高等学校教諭専修免許(音楽)	平成11年3月	東京都
小学校教諭一種免許	平成9年3月	神奈川県

研究実績に関する事項				
代表的な著書、論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 1 「近代フランス音楽における日本の表象——ジョルジュ・ミゴ《Hagoromo》を例として」	単著	平成 20年 3月	『お茶の水女子大学比較日本学研究中心研究年報』第4号	ジョルジュ・ミゴ作曲のオペラ・バレエ《Hagoromo》にあらわれた日本の表象と、作曲家の狙いについて、可視的な舞台表現と、音楽表現の両面から検討を行った。作曲家が、同時代のキュビズムをはじめとした前衛芸術を意識し、それに対抗する自分ならではの表現を模索していた。そこで日本の題材が選ばれた理由について考察した。口頭発表1の報告論文。
2 「近代フランス音楽にあらわれたアジアの表象——20世紀前半音楽シーンにおける異国の伝統の取り扱いについて」	単著	平成 21年 3月	日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト振興事業平成20年度研究報告『伝統から創造へ 3』	創作に異文化要素を持ち込む際、「奇異なるもの」という視線を脱し、その正統性を重視する態度はどのようにあらわれるのだろうか。ルーセルの《パドマーヴァティ》、ミゴの《Hagoromo》の成立背景に、台本作者レイ・ラロワの創作態度を関連づけて、20世紀前半のパリの音楽シーンにおいて、19世紀的な表層的エグゾティスムから脱して「正統性」を求めようとする動きについて論じた。
3 ルイ・ラロワにおけるアジア音楽の認識について——『中国音楽』(1910年頃)を中心に	単著	平成 24年 3月	『民族藝術』第28号	音楽学者レイ・ラロワの著書『中国音楽 La Musique chinoise』(1910年頃)及びその下書きノートの分析を行い、ラロワがアジア音楽に対して持っていた知識と問題意識を明らかにした。分析の結果、ラロワの主要な関心が音律形成の起源にあったことがわかった。また、中国音楽の起源がギリシアにあるとする当時の通説への懐疑的姿勢がみられた。これは、典拠文献にはない、ラロワ独自の問題意識である。
<その他> (口頭発表) 1 「近代フランス音楽における日本の表象——ジョルジュ・ミゴ《Hagoromo》を例として」	単独	平成 19年 7月	第9回国際日本学シンポジウム：セッションI『〈日本〉表象の交差——ジャポニスムの文学と音楽——』(於 お茶の水女子大学)	19世紀末から20世紀初頭、「日本が西洋人にどのように受容されたのか」「西洋が日本人にどのように受容されたのか」という、交差する視点で、当時の文学と音楽の在り様を考察するシンポジウムにおける発表。ここでは、実際に《Hagoromo》の2台ピアノ版楽譜を用いてあらかじめ発表者が演奏・録音した音源を用いて、音楽分析に基づく研究発表を行った。
2 「近代フランス音楽にあらわれたアジアの表象——20世紀前半音楽シーンにお	単独	平成 20年 6月	日本学術振興会人文社会科学振興プロジェクト研究領域V「伝統と越境」サブ研究グループ	アジアの文化要素を西洋音楽作品に持ち込むときの、正統性獲得についての創作側の意識や態度について、ある種の転換期となるのは、具体的な情報の流入や、相互の人的交流が増加する、20世紀の前半であったといえる。この時期のパリの音楽シーンに焦点を当て、19世紀的な表層的エグゾティスムから

<p>る異国の伝統の取り扱いについて」</p>			<p>「芸術文化における『伝統的なもの』」第15回研究会 (於 聖徳大学)</p>	<p>脱して「正統性」を求めようとする動きについて、ルーセルの《パドマーヴァティ》、ミゴの《Hagoromo》、両者の台本作者であるレイ・ラロワの創作態度に触れつつ論じた。</p>
<p>3 「レイ・ラロワにおけるアジア音楽の認識について——『中国音楽』(1910年頃)を中心に」</p>	<p>単独</p>	<p>平成 23年 4月</p>	<p>第27回民族藝術学会大会(於 岡山市立オリエン特美術館)</p>	<p>音楽学者レイ・ラロワの著書『中国音楽 La Musique chinoise』(1910年頃)及びその下書きノートの実行、ラロワがアジア音楽に対して持っていた知識と問題意識を明らかにした。分析の結果、ラロワの主要な関心が音律形成の起源にあったことがわかった。また、中国音楽の起源がギリシアにあるとする当時の通説への懐疑的姿勢がみられた。これは、典拠文献にはない、ラロワ独自の問題意識である。</p>
<p>(ポスター発表) 4 『『保育指導方法』と保育実践力～音楽活用スキル育成の視点から』</p>	<p>共同</p>	<p>平成 28年 5月</p>	<p>第69回日本保育学会全国大会(於 東京学芸大学)</p>	<p>保育士養成校における音楽教育における、汎用的・領域横断的な学びが希薄になりがち傾向を克服することと、実践を通して保育理論の総合化を図ることを目的として、保育系教員と音楽系教員が協力した授業実践の報告。影絵劇制作を通して、保育実践において音楽を活用する意識と技術の向上を図る指導を行った。</p>
<p>(調査報告) 5 「20世紀前半フランスにおけるアジア音楽の媒介システムについて——レイ・ラロワに関する一次資料の閲覧及び収集」</p>	<p>単独</p>	<p>平成 20年 3月 平成 19年 10月 採択 平成 20年 2月渡航</p>	<p>文部科学省「大学院教育改革支援プログラム」平成19年度採択プログラム『日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成』(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科)による海外調査研究 報告書： 「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成19年度活動報告書海外研修事業編、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科</p>	<p>音楽学者レイ・ラロワと交流のあった作曲家達がアジアを題材とする作品を多数作曲したことに着眼し、異文化受容のプロセスを、ラロワが果たしていた「媒介者」としての役割に焦点を当てることで説明しようとするもの。本調査では、ラロワの遺族を訪ね、書簡、著作の草稿等を収集した。また、音楽批評家であったラロワが、当時の新聞等でアジア音楽をどう紹介したかを知るため、日刊紙『コメディア』等のラロワ執筆記事を収集した。これらは、パリでのアジア音楽受容に、ラロワがどう関わり、ラロワ自身がどのようにアジアと接していたかを実証する根拠資料となる。</p>